青山国際政経論集 118 号、2026 年 11 月

研究ノート

カトリック平信徒、岡延右衛門代議士による永井隆博士の表彰をめぐる国会発言について

渡　邊　千　秋＊

はじめに

「戦後 80 年」の夏である 2025 年（令和７年）８月は、長崎の原爆で自らも被爆しつつも救護活動に取り組んだ医師、永井隆博士の姿が、マスメディアを通じて改めて人々に届けられた月であった。たとえば、同月９日、長崎市で開催され全国中継された平和記念式典に出席した石破茂首相（当時）が、永井隆が記した『長崎の鐘』から「ねがわくば、この浦上をして世界最後の原子野たらしめたまえ」という一節を引用したとする記事が新聞に掲載された[1]。また、NHK は「英雄たちの選択　昭和の選択―原爆と平和のはざまで～長崎の鐘 80 年目の真実」というタイトルの、永井隆の人生を追うドキュメンタリー番組を放送した。こうして、永井隆の名は、時の流れを越えて人々のあいだで想起されることとなった。

永井隆とは、自らも重傷を負いつつ、また妻を原爆で失いながらも、被災者の救護活動に当たった人物としてよく知られる。彼は、1950 年（昭和 25 年）、ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹とならんで国から表彰され、銀杯を贈られた[2]。しかし、この 1950 年の受賞をめぐっては、永井の表彰に根強く反対

＊　青山学院大学国際政治経済学部教授

1）『朝日新聞』朝刊、2025 年 8 月 10 日、3 頁。

2）長崎市永井隆記念館 HP を参照されたい。

する政治的・社会的勢力が存在した。また、昭和天皇も彼の表彰に懐疑的であったといわれている[3)]。

連合国軍占領下の日本にあっては、戦前の国家的表彰システムが停止されるなかで、永井の表彰に国会発言を通じて道筋をつけた代議士として、岡延右衛門の名を挙げることができる。本稿では、岡の発言に言及しつつ、永井隆の国家表彰が決定される過程を振り返ってみたい[4)]。

1. 岡延右衛門とはどのような人物なのか

まず、岡の政治的・社会的バックグラウンドを明らかにしておこう[5)]。岡延右衛門は、長崎県北松浦郡黒島村に、1899 年（明治 32 年）3 月 15 日に生まれた[6)]。彼は、迫害を逃れて島に辿り着いた潜伏キリシタンの島、黒島に生まれたカトリック平信徒であった[7)]。後に上京し、早稲田大学専門学部政治経済科を卒業後、『万朝報』のジャーナリストとして活動した。内閣情報局嘱託として北支（北京）へ派遣された経験をもつ人物である[8)]。

戦後は国政へ挑戦、1947 年（昭和 22 年）4 月の第 23 回衆議院議員選挙で、長崎 2 区で日本自由党から立候補したが落選した。続いて、日本国憲法施行後初の衆院選となった 1949 年（昭和 24 年）1 月の第 24 回衆議院議員選挙で同

---

https://nagaitakashi.nagasakipeace.jp/japanese/stories/8.html　なお、本稿で用いるすべての URL に関して、最終アクセス日は 2026 年 7 月 14 日である。

3）相馬清貴「昭和天皇と永井隆 ―永井隆の表彰問題を手掛かりとして―」『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』57 巻 2 号、2023 年、31-32 頁。(http://hdl.handle.net/10561/1968)

4）本稿で用いる国会の諸委員会や本会議での議員による発言は、国会議事録検索システムを通じて閲覧した。以下の URL を参照されたい。https://kokkai.ndl.go.jp/#/

5）この原稿の執筆にあたり、岡延右衛門氏のご遺族から貴重な関係資料をご提供いただいた。この場を借りて心よりのお礼を申し上げたい。

6）現在の長崎県佐世保市黒島町にあたる。黒島は、UNESCO 世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を構成する 12 の資産の 1 つである。

7）岡が記した自伝的小説『愛に生きる人々』の序文には、彼の黒島への思いが込められている。岡延右衛門『愛に生きる人々』厚生閣、大正 14 年。国会図書館デジタルコレクションで読むことが出来る。(https://doi.org/10.11501/1016897)

8）片岡千鶴子「岡延右衛門」、学校法人上智学院新カトリック大辞典編纂委員会編『新カトリック大事典 1』研究社、1996 年、901 頁。

じく長崎２区において民主自由党から出馬し、当選した[9]。代議士としての岡は、文部委員会において理事となり、委員長代理を務めるなど、積極的な議員活動を行った。しかし 1952 年（昭和 27 年）10 月の第 25 回衆議院議員選挙で落選し、その後国会議員に選出されることはなかった。

2. 戦後の日本における国家表彰プロセスの構築

GHQ の占領政策に基づいて国の諸制度が変更されるなかで、天皇大権に属していた戦前の従来的な叙勲は、実質的に消滅した。文化勲章などは存在し続けていたが、戦前のような生存者の叙勲は継続できなくなっていた[10]。

そのなかで、生存者を表彰するためのひとつの手段として浮上してきたのが、日本国憲法の定める国権の最高機関としての国会で決議を行う、という方法であった。国会で決議するにあたっては、的確な調査等が必要となる。そこで、その調査を行う母体となったのが、第５回国会で設置が決定された超党派的性格をもつ衆議院考査特別委員会であった[11]。

実は、この考査特別委員会の設置以前に、国政調査権に基づいて成立した隠退蔵物資特別委員会や不当財産取引調査特別委員会などが存在していた。しかし、これらの委員会に喚問した証人の偽証等に関する罰則規定がないため、国会が調査権の行使に支障をきたしうることが問題となっていた、という背景がある。いずれにせよ、考査特別委員会が誕生し、委員会が扱う調査の範囲は以下のように定められた。

> 二、本委員会は、
>
> (1) 昭和二十二年十二月十一日本院において議決した不当財産取引調査特別委員会設置に関する決議の二の調査をする外、不正に租税の賦課を免れさせ、納税を

9) この選挙では民主自由党が圧勝し、社会党が大きく議席を減らす一方で、日本共産党が躍進した。

10) 那珂馨『勲章の歴史』雄山閣出版 , 1973 年 , 26-27 頁。(https://doi.org/ 10.11501/11894505)

11) 斎藤秀夫『国会と司法権』日本評論新社、1955 年、125-126 頁。(https://doi.org/ 10.11501/2999210)

> 妨害する等納税意欲を低下させる行為、不法に労働争議を挑発させる行為、その他の諸行為で日本再建に重大な悪影響を興えたものと、その責任の所在を調査する。
>
> (2) 文化、科学、技術等の発達に寄興をもって日本再建のため多大の貢献をした諸行為を調査する[12)]

こうして衆議院に設置された考査特別委員会は、日本の再建に「悪影響を及ぼした」事項に関して調査することに加えて、文化・科学・技術に関連して日本国の再建に多大なる「貢献」を果たした事項に関しても調査を行う機関となった[13)]。

3. 衆議院考査特別委員会設置について

実際のところ、衆議院に考査特別委員会が設置されるまでには、政党間の意見をまとめるにあたり、紆余曲折があった。設置が決定された過程を振り返っておこう。1949 年 3 月 17 日の衆議院議員運営委員会では、民主自由党の石田博英が、

> 日本再建に重大な悪影響を興えた諸行為と、その責任の所在を追究調査いたしますると同時に、逆に日本再建のために科学、文化、その他の発達に大きな貢献をした行為を調査し、その顕彰するというような建設的な目的をも含めた、考査特別委員会という名前のものに、発展的に進めて参りたい[14)]

と述べ、設置を促進したい旨の発言をした。しかしこれに対し、日本社会党の浅沼稲次郎は、石田の発言について、あくまでも設置が「参考送付」であるこ

12) 国立公文書館、昭和 25 年叙勲褒章巻 8。「考査特別委員会の設置に関する決議」
13) 斎藤秀夫、前掲書、158-159 頁。
14) 第 5 回国会、衆議院議院運営委員会、第 2 号、昭和 24 年 3 月 17 日、石田博英発言。石田は、その後石橋泰山内閣官房を務めることになる人物である。

とを確認し、特別委員会を設置すること、とくに国家レベルで称揚すべき功労者といった内容を含むことであるから、本会議で議論すべきであると反論する。

> ただあとの日本再建に重大な惡影響を與えた諸行為とその責任の所在、並びに日本再建のため科学、文化等の発達に多大の貢献をした諸行為、こういうようなことは一應本会議の議を経なければ、それを委員会の性質の中に加えるわけに参らぬと思う。従つてこれは正式に出して來ない。[15)]

双方譲らず、次回の議院運営委員会へ案件は持ち越された[16)]。

3月19日に開かれた議員運営員会でも、日本社会党の土井直作、日本共産党の志賀義雄、労働党の松谷天光光などが考査特別委員会設置に反対する意見を提出し[17)]、続く3月26日にも議論が続いた[18)]。しかし、ついに3月28日の議員運営委員会で設置決議がなされ、衆院内の多数派である民主自由党並びに民主党から共同提案が出された翌日3月29日の衆議院本会議で、設置に関する決議案が可決された[19)]。

考査特別委員会の構成員は30名に定められたが、委員の政党別割り当て数をめぐり、再び議論となった。結果として民自党17名、社会党3名、民主党4名、共産党2名、国協党1名、公正倶楽部1名、農民党1名、労農党1名で構成されることが決定された[20)]。その後、衆議院議長が、4月7日、考査特別委員会委員30名を指名した[21)]。委員長に鍛冶良作が互選され、鍛冶により8名の理事が指名された[22)]。また事務局長として明禮輝三郎が指名され、他

15）第5回国会、衆議院議院運営委員会、第2号、昭和24年3月17日、浅沼稲次郎発言。
16）第5回国会、衆議院議員運営委員会、第2号、昭和24年3月17日、明禮輝三郎発言。
17）第5回国会、衆議院議員運営委員会、第3号、昭和24年3月19日。
18）第5回国会、衆議院議員運営委員会、第6号、昭和24年3月26日。
19）第5回国会、衆議院本会議、第7号、昭和24年3月29日。
20）第5回国会、衆議院議院運営委員会、第11号、昭和24年4月2日。
21）第5回国会、衆議院考査特別委員会、第1号、昭和24年4月8日。
22）同上。

4名の事務局員も決定された[23]。

その後、明禮は、委員会を紹介してこう述べている。

> 国会の縮図であり花形であると言われた不当財産取引調査特別委員会が第五国会に於いては考査特別委員会に生れ替った。これと同時に、今迄の不当財産取引調査特別委員会のやって来た仕事の他に日本再建の為め重大な悪影響を与えたもの、並に日本再建の為重大な貢献をした諸行為をも併せて調査することとなった。洵に画期的な重大任務である。[24]

こうして考査特別委員会は、日本国憲法施行後初めての国会での民主主義国日本としてのシステム改変の一旦を担うために誕生した。そのような文脈の中で、永井隆は、日本の再建に重大な貢献をした人物として、国の表彰の調査プロセスにのせられることとなる。

4. 永井隆の表彰をめぐって

1949年4月27日の理事会で永井の表彰に関する基礎調査着手が決定されたのち、調査が実施された。そして日本民主党（野党派）の小川半次が発案者となり、9月12日の考査特別委員会で、永井が原子病の研究を行いつつ同病の犠牲となるも科学者として崇高なる人格をもつ人間であること、また『この子を残して』やその他の著作が社会教育上大きな貢献をしたという点に基づき、調査を行い彼を表彰するべきだとの提案がなされた[25]。

明禮輝三郎は基礎調査に基づき、永井が表彰に値する人物であると考えられる理由を以下のように述べた。

> 一、永井博士はその業績によつて、偉大なる科学者ということは別として、一科

23）第5回国会、衆議院考査特別委員会、第2号、昭和24年4月20日。
24）明禮輝三郎「考査特別委員会の使命」、『国会』2巻、6月号、昭和24年、41頁。
25）第5回国会、衆議院考査特別委員会、第35号、昭和24年9月12日。

学者として誠実に眞理を探求する。そして学界に対し身をもつて貴重な研究資料を残そうとしている。永井博士は放射線医学の研究と、その実際に闘いつつ、白血病で倒れた。それは職業上の放射線障害と診断された。永井博士は生死の限界を越えて、科学者の任務を果した。そしてまた新たにその任務を果している。その科学精神は崇高である。

二、永井博士の存在は長崎の原爆で新たなる意義を持つた。永井博士は原子力時代を顧みて、われとわが体をささげ人類の幸福を希求して、一般大衆のうちへ世界平和への意思を浸透させる。永井博士終戦後の言動と著述は、社会教育上大いに寄與しているものである。永井博士は日本復興のために、生活苦を起克して働く者の友であり、悩む者には慰めを與え、弱い者には力を與えて再建意欲を作興する。その驚くべき生命の力は、立ち上る一般大衆に対する一大指針と言わざるを得ない。

要するに永井博士は文化と科学に寄與して、日本再建のために貢献すること大なるものがある。

以上であります。[26)]

5. 日本共産党所属議員からの反対意見について

他方で、日本共産党の神山茂夫は、真っ向から反対を表明した。この折の神山の発言の中心にあるものは、永井の業績が果たして戦後日本の再建に役立ったのか、表彰に値するレベルの医学・科学なのか、という疑念である。次の発言に、その思考は明確にあらわれている。

ことに私たちが問題とせざるを得ないのは、この基礎調査報告の中にも、科学者としてこの人の業績がどこまで高いかということについては疑いがある。言葉には書いていないが、そういう内容が盛られている。現に永井博士をほんとうの意味の科学者としてわれわれが見る場合には、たくさんの問題があるのであります。

26) 第 5 回国会、衆議院考査特別委員会、第 35 号、昭和 24 年 9 月 12 日。明禮輝三郎発言。

彼は昭和八年以來約十五篇の論文その他を発表しておりますが、これが日本の学界に與えた影響は必ずしも大きいものではない。一部はすでに忘れられており、また一部はその到達した水準から言つても、また今日の段階から言つても低いのであります。この事実を私たちは冷静に見ておかなければならぬ[27]。

神山は、必要とされる医学とは、「人民」の生活を直接的に守るものでなければならず、たとえば結核やハンセン病との戦いこそが日本の民主的再建に役立つものである、と具体例をあげ、永井の研究業績は、国の表彰には値しないとして、以下のように断言する。

さらにもう一つ大事なことは、日本に欠けている基礎医学の面における活動でありまして、たとえば細胞原形質の研究、その他についてはわれわれの未熟なまた低い水準をどうして補うか、こういう方向に医学者が努力した場合においてのみ、その医学を私たちは眞に日本の民事化及び再建に貢献したと言い得るのでありますが、遺憾ながら永井博士の業績はそういうものではなくて、むしろ原子爆弾という特殊な兵器によつて起つた病氣に対する研究が中心になつておるという点も一つの問題を出すのでありますが、しかもそれの水準が低いということを私は指摘せざるを得ない[28]。

注目すべきは、永井隆と同様に表彰の候補とされた人物が、湯川秀樹であったことである。２名の基礎調査が行われたのは、湯川がノーベル物理学賞を受賞する以前のことであったのだが、神山は同時に候補となった二人の研究者の力の差について、湯川の真理追究の姿勢と比較しながら永井の姿勢を暗に批判し、以下のように述べた。

湯川秀樹博士は、すでに 1913 年において物質の基礎的構成の要素である素

27）第 5 回国会、衆議院考査特別委員会、第 35 号、昭和 24 年 9 月 12 日、神山茂夫発言。
28）同上。

粒子に関する研究を発表して、全世界の物理学界を驚歎せしめたのであります。と言いますのは、当時の日本の支配態勢が、完全に軍國主義的な指導のもとに置かれて、学問、研究への圧迫が非常に強かつた。その中で新しい物質構成の要素としての中間子の存在を、彼が理論的に指摘した。しかもこれが完全に正しいことは、37年に至りまして宇宙線の中に中間子として存在していることが明らかになりました。1948年には、これが完全に人工的につくり出されている。従いまして原子学者としての地位において、湯川秀樹氏の場合においては、單にわれわれ日本人が日本民族の誇りとして誇るべきではなく、全世界の物理学者が彼の事業に対しては驚異と大きな尊敬を拂つているということは、現に彼がアメリカにおいてその研究を継続している事実の中にも現われております。しかも湯川博士の場合大事なことは、彼があの戰爭情勢下に、眞に眞理と科学のために闘い抜いた点にあるのでありまして、この点において永井博士とはまつたく違つている点があるのであります。従つて永井博士が科学者として大したものでないということは、基礎調査の中にも現われておりますが、むしろ彼の科学者としての業績は、今言つた人たに比べればはるかに低い。[29]

また神山は、永井がジャーナリズムによって時代の寵児のように扱われていることに対しても厳しいまなざしを向ける。たとえば『ロザリオの鎖』に描かれる永井の妻・緑の姿を引き合いに出し、将来大人物となる自分にとって無教養な農家の娘である緑は自分の妻として資格がないのではないか、と永井が考えていたとする評論家、浦松佐美太郎の意見を取り上げた。そのうえで、ベストセラーが生まれる仕組みは非常に非科学的であり、感情的な表現に「エロとそれから神様にかかって」いる上位10冊のうちに入っているだけのことだと述べるのである[30]。

従つてこういうベスト・セラーズの中に含まれておるとか、あるいはラジオで宣

29）同上。
30）同上。

傳された、あるいは新聞でこういうふうに宣傳されたということによつて、その人の著書が実際の社会人心に與える影響を見るということは、まつたく軽卒なジヤーナリストはすることが許されるかもしれませんが、國会のとるべき態度でないということを強調せざるを得ない。しかもそつジャーナリストの中にも、すでにこの永井氏のものに対する痛烈な批判が出ておる[31]。

また太平洋戦争中の永井の軍部への協力姿勢を辛辣に評して、こう述べた。

私たちは終戦後四箇年も立つた今日、彼の戦時中の行爲を一々ここにあげつろう必要はありませんが、永井博士の病氣の直接の原因は、当時軍医として彼が活動しておつたことと不可分に関係しておる。しかもレントゲン学者としては許されないような状態のもとで活動した。これは一方では、当時の軍部の圧力があつたことは事実でありますが、その間科学者として眞に科学に忠実であれば、とり得ないような超過労働をしている。[32]

そのうえで、永井のカトリックへの帰依に触れる。永井はカトリック平信徒であるがゆえに、戦争とよしとすることも平和をよしとすることも可能な人物である、と厳しく断罪するのである。

彼はカソリツク信者であるということで、ある場合には戦爭遂行に、ある場合には絶対平和思想に、どちらにでも向くことができる。ここに彼が戦爭とは何か、また平和とは何か、正義の戦爭とは何か、また不正義の戦爭はどうなるか、敗戦の結果日本はどういう状態になつたかということすらまつたく考えていない。この点非常な偏見的な立場に立つておることを遺憾ながら指摘せざるを得ない。[33]

31）同上。
32）同上。
33）同上。

神山の批判は永井個人にだけではなく、カトリック教会全体の戦争協力姿勢に及んでいる。自らが獄中で見知った、プロテスタントのキリスト教者で弾圧を受けた人々の経験を思い起こし、それに類する闘争の伝統がカトリック教会側にはないとする。そのうえで、永井自身が、カトリック的科学のみが正しいという考えを表明しているとして、憤りともいえる気持ちを次のように吐露し、次のようにも述べている。

> また太平洋戰爭中においても、プロテスタントの各流派の人が多くあの東條の彈圧下に闘い抜いたということは、私たち獄中にいた者はよく見て知つているところがカソリツクの中にはそういう傳統がない。しかもこの永井君はカソリツクとして戰爭に対して眞に今まで闘かわなかつたばかりでなく、今でも直に闘い得ない。しかも彼はカソリツク信者の科学だけが正しいという見解を至るところで漏している。また彼は自分の関係している原子物理学に関する科学者はある場合認めるが、他の科学者の地位や役割あるいは他の医学の役割、たとえば婦人科、小児科の科学者の偉大なる業などというものは見ておらない。こういう点でまつたく一方的な偏見に満ちているということは事実なのであります。[34]

よって、永井を表彰することは、日本の民主化に逆流することになると結論付け、次のような言葉で遺憾の意を表明するのであった。

> われわれは眞に現実の生活を守りながら日本を眞に民主化し、日本を独立させ日本をほんとうに復興する道によつてこそ全世界の恒久平和の一環として、日本に平和を持ち來すだけでなく、全世界に平和を持ち來すことができるのであります。こういう観点に立つて、永井君を表彰することは日本の國家のために、さらに日本國民のために、まことに遺憾である。從つて余儀なく反対せざるを得ない。[35]

34）同上。
35）同上。

このような神山の言からは、永井の原爆に関する語り、「神への犠牲により平和がもたらされた」とするいわゆる燔祭説と分類される原爆被害に関する永井の理解を批判する姿勢以外にも、主に左派陣営による、永井に対する根強い政治的な視野をともなった批判があったことが推察される[36]。

6. 岡延右衛門による永井表彰賛成の論調

このような、永井を国会表彰の対象とすることに対する国会内の反対意見に対して、公然と立ち向かったのが、民主自由党の岡延右衛門であった。

岡が考査特別委員会のメンバーとなったのは、1949 年 8 月 5 日のことであり、永井の表彰をめぐる議論は、同委員会での委員としての岡の「初仕事」でもあった[37]。岡は、ジャーナリストであった自らの過去における学びを活かし、まず、相手の誤認を正すのである。岡は、永井の病状は原子爆弾の放射能汚染にはじまったものではなく、彼が生涯行ってきたレントゲン研究によるものである、と述べて世間にある誤情報の訂正から発言をはじめた。

そして、「低俗な」ベストセラー作家と神山が評した永井の執筆活動は、カトリック平信徒としての永井による、信仰に根差した平和主義を表明するための行為であることを主張する。平信徒としての永井のことばには人々の心をとらえる何かがあり、それゆえにベストセラーが生まれる、といって神山の発言を論破するのである。

> 今申しました通り永井博士のものはあの淡々たる随筆調でありまするが、これが世道人心に食い入りまするために、第一位、第三位、第七位、第十二位という、文豪と称せられる人でさえも、一生に一度ベストーセラーズの第一位になることをもつて光栄としておる、こういうのにわずか四年の間に、こういう業績を残し

36）永井の長崎浦上に関する「燔祭説」については、以下を参照されたい。四條知恵『浦上の原爆の語り』未来社、2015 年、93-99 頁。

37）岡は、委員松本善壽及び安部俊吾の辞任により、補欠として宇田恒とともに、議長の指名で委員に選任された。第 5 回国会、衆議院考査特別委員会、第 32 号、昭和 24 年 8 月 5 日。

たことは、いかに永井博士の貢献が偉大なるものであるか、また彼の信仰に根ざすところの――神山君はカトリツクはまつこうからきらいでありますが、カトリツクの信仰に根ざすところのこの人道主義的平和主義が、いかに人心にアツピールするかを如実に物語るものであるということが言えるのであります。[38]

また岡は、日中戦争に遡る永井の従軍医師としての歩みを思い起こす。確かに当時、戦争容認の姿勢があったことを認めながらも、その体験によってこそ、現在は世界平和のために戦うことになったのだという論旨を展開する。

なるほど永井博士は戰爭に貢献したでしよう。しかしながら今や永井博士は完全なる平和主義となり、科学のためには自分の家の病床を直理探求の実験台として人道のためには死線をこえて人類の幸福と世界平和を希求し、戰爭をやめようと叫んでおります。そうして科学を戰爭のためにあらずして、人類の眞の幸福と世界平和のために役立たせようとしております。そのために解剖台上にその体を乗せる日まで眞の尊い戰いを戰いつつあるのであります。これが科学者たる人間として眞の殉教精神を体現したものでなくて何と言えるでありましようか。この崇高なる精神は日本文化と科学の美しい強い推進力をなすであろうことを私は疑わないのであります。[39]

そして、永井の病床に世界の国々から、カトリックの人脈を通じて多くの巡礼団が訪れている実態にふれ、それこそ、永井への敬意の証明であると述べる。

この五月にもサビエル大祭が長崎において行われました。遠くはスペイン、フランスあるいはアメリカ、方々の欧米の國々からたくさんの巡礼團が集まつて來たのでありますが、あの永井博士、私は実は個人的にも多少知つているのでありますが、あの永井君のまつたくの小屋、あそこを訪れて、まるでそこに聖者を訪う

38）第 5 回国会、衆議院考査特別委員会、第 35 号、昭和 24 年 9 月 12 日、岡延右衛門発言。
39）同上。

がごとくかれらは敬意を表して行つたのであります。[40]

加えて、岡は、日本共産党に所属する神山に対する痛烈な、イデオロギー的な相違に基づく批判をも展開した。岡は、共産党の思考とカトリック的な思考が相容れることはない、共産党に反対されることによって、あらためて、カトリック平信徒である永井の表彰は重要なものと認識されると考える。そのうえで、日本共産党の所属ではない議員に向けて、永井の表彰を前進させるために力を合わせるべきだ、と呼びかけた。

> カトリツクは共産党とはソ連に政権ができる前すなわち百年ほど前共産主義という言葉ができたときからあのローマ法王廳は戰つておるのであります。だからとうてい相一致するものはないのでありますから、その意味からして神山君がこれに反対することは当然でありまして、共産党は何ものにも反対するのである。たとえばあの古橋君一行のあの業績、あれは全國民が――共産党を除く全國民がおそらくすなおな氣持で受取つております。ところがアカハタはあれにさんざん食つてかかつております。こういう事実から見ましても、とうてい共産党が一致してこれを支持することは私は信じ得ないのでありまして、これはいたし方がないと思つております。むしろ共産党に反対されることによつてかえつて輝きを増すのではないか、こうさえ思われるのであります。何とぞ共産党を除く委員諸君が満場一致御賛成あらんことをお願いする次第であります。[41]

この岡の発言をもって、考査特別委員会の鍛冶良作委員長は採決にはいり、賛成者多数で本格的調査を開始することが決定された。翌９月 13 日の読売新聞は、永井の調査を表彰のためのルートにのせた岡の発言に着目しつつ、次のように伝えている。

40）同上。

41）同上。ここで名前が挙げられている古橋とは、水泳選手の古橋廣之進を指すと思われる。

> 12日の衆院考査委員会は午前11時開会、平事件、石川事件、広島日銅事件について高木、内藤、鍛冶の三委員から現地調査の結果を報告、ついで岡延右衛門氏（民自）の動議により、永井博士功績調査に関する件を可決（略）[42]

1949年9月30日付で考査特別委員会の鍛冶良作委員長は、衆議院議長に対して調査に着手する旨を報告した[43]。他方で日本共産党の神山茂夫は、永井の表彰の件が衆議院への報告以前に早々と新聞に掲載されたことについて苦情をのべている[44]。

7. その後の経過

その後、10月25日の第6回国会衆議院本会議にて、調査部の基礎調査の終了・考査特別委員会審議の結果、永井の本格調査に入る旨が報告された[45]。12月1日に、田川房太郎神父、元九大助教授石川敏雄、厚生省児童局長小島徳雄、評論家中島健臓の4名が参考人として考査特別委員会に招喚された。この折にも当初から、参考人への質問という形をとった永井表彰に対する批判が表出した。民主自由党の井出光治は、すでに厚生大臣から『この子を残して』をもって賞を受けた永井が、それ以上表彰される意味があるのかという問いがなされた。また同じく民主自由党の内藤隆は、誰が本を読むべきとして表彰したのかを確認し、皮肉のこもった一言を投げる。

> 要するに敗戦の後の父親、母親のすさんだ気持に読んでもらつて、児童福祉のために盡してもらいたい、こういう意味でしたな。[46]

42）『読売新聞』1949年9月13日、1頁。
43）第6回国会、衆議院考査特別委員会、第1号、昭和24年10月26日。
44）第6回国会、衆議院考査特別委員会、第2号、昭和24年10月27日。
45）第6回国会、衆議院本会議、第1号、昭和24年10月25日。
46）第6回国会、衆議院考査特別委員会、第11号、昭和24年12月1日。

浦松佐美太郎による永井批判をもとに、社会革新党の小林進も永井の人間性に関する疑念を呈し、審議の方向が揺らいだ折には、岡延右衛門が永井を擁護して、以下のとおり発言した。

> 実は今年の九月十二日にこの問題を調査することについて論議して、それで調査することに決定したのでありますが、（略）毎日新聞です。あの政治欄、第一面の下の方の、毎日では余録と言いますか、余滴と言つておるか知らぬのですが、あの欄に、永井博士は書物を書いた、それによつて金が入つた。それで家もつくつた。彼は恵まれた男だ。こういうものを表彰する必要はない。これは字句は違いますが、結論はそういうことが出ておる。ところがあにはからんや永井博士は、あの原子爆弾が投下された直後において、あそこの附近の僧院の、主としてカトリツクの信者たちが零細な金を集めて、永井博士の体を入れられるだけの小屋をつくつた。それが真相である、もちろんこういうことが問題になつたのは、それより前に、御承知の通りジヤーナリズムによつていろいろ論議されて、しかもこれが考査特別委員会に取上げられたその直後においてすら、十分の研究をなさずして、大新聞中の大新聞がこういうことを基礎として非難している。ですから、そういうジヤーナリズムの非難というものは、ほとんどこの委員会として参考とするに足らぬと私は思う。47)

> （略）しかも永井博士は著書の収入は自分で管理しておりません。これは平和国家再建のために、あるいはまた近くの自分の町、長崎市の文化都市建設のためにこれを使う。管理は決して自分でやつていないという人格の男である、そういうことも一切調査不十分であるといえばやむを得ませんけれども、実情はそれが真相なんだ。でありますから、これは同僚委員の諸君にお願いでありますけれども、そういうジヤーナリズムのいろいろな非難の片言隻句をとらえての論争は、でき

47）第 6 回国会、衆議院考査特別委員会、第 11 号、昭和 24 年 12 月 1 日、岡延右衛門発言。

るだけ差控えていただきたいと思います[48]。

岡は、永井が著作をとおして稼いでいるというマスコミがつくるイメージに対し、石川に次のように尋ねる。

永井博士の友人としてお伺いするのですが、実は永井博士は原稿料というものは一切自分で手にしない。世界平和に貢献するようなことがあれば何かそういう方面に使いたい。もつと直接的には、長崎がいわゆる文化都市であるという意味において、文化の方に貢献するいい方法があれば使つてくれというようなことを、今は故人となられましたが、若松代議士などにも相談したことがあるそうでありますが、あなたはそういう事実をお聞きになつておりますか。[49]

石川は、永井が印税を自分ではとらず、「浦上の再建か何かの団体」のために使ったと答えた。また岡は、永井は印税によって家を建てたわけではなく、その家もたいへん小さなものであることを、質問をなげかけながら明らかにしていった。

ジヤーナリズムによつて非常に誤解を招くおそれがありますから、どの程度のものか、バラックに過ぎないのですか。[50]

という質問に対して、石川は、一間か二間であろうというと回答をした。引き続き、岡は

その家も、「この子を残して」を書く前にできたものであるから、印税でないことははつきりしておりますね。その地方の人たちは、永井博士は献身的に戦争中

48）同上。
49）同上。
50）同上。

も無料で治療して歩いた。それに報いるべくその辺の信者たちが拠金をしたり、労力を奉仕してその家をつくつたというふうに言われておりますが、あなたはそれについて何か御存じですか。[51]

と尋ね、そう推察するという回答を石川から引き出している。

12 月 15 日には審査が続行され、田川房太郎神父[52]が参考人となったおりには、岡は、長崎を訪れる外国からの観光客や巡礼者が永井を訪れていることについて尋ね、海外からのまなざしが永井の上に注がれていることへの注目を促した[53]。また永井が印税を文化的・平和的事業に使ってほしいという願いをもって居ることに言及して、岡は以下の質問を行った。

実は私数箇月前に、今は故人となりました若松代議士から、永井博士が印税を文化的、平和的事業のために何とか使つてもらいたいのだが、一つの管理委員会をつくつてくれないかというような相談を受けた。それは式場隆三郎という人を通じてそういう相談を受けた。そこで岡君、君も一緒に委員に入つてひとつそういうものをつくろうじやないか、こういう相談を受けたことがあつたのですが、突如として若松代議士は脳溢血のために倒れましたために、それは実現しないで今日に至つておるのでありますか、何かあなたもそういう御相談なり、あるいはうわさなりを耳にされたことがございましようか。[54]

田川神父は

私別に永井先生と話したこともありませんし、その関係者と相談したこともありませんし、ただ最も永井先生をよく知つているところの田川初治先生というのが

51）同上。
52）田川房太郎神父はこの当時暁星学園校長であり、のち、マリア会日本管区長を務めた。
53）第 7 回国会、衆議院考査特別委員会、第 2 号、昭和 24 年 12 月 15 日。
54）同上。

> います。この田川先生の手紙によりますと、この印税その他は中学、病院、あるいは社会事業に寄贈なさつて、そうしてほんとうに清貧に甘んじた生活をしていらつしやる。[55]

と回答した。こうして岡の質問を契機として、文化都市長崎へむけた経済的な貢献者としての永井のイメージが改めて引き出されることとなった。

永井の体調悪化を念頭に置きつつ、12 月 23 日の会議で委員会による報告原案を最終報告書として可決、考査特別委員会委員長であった鍛冶良作は、衆議院議長幣原喜重郎にあてて、永井隆の表彰について、以下のように速やかに適切な処置を取るよう求めたのだった。

> 本委員会は医学博士永井隆君の業績が去る 12 月 4 日の衆議院考査特別委員会設置に関する決議第二強第二号即ち文化科学技術等の発達に寄与し、もつて日本再建のため多大の貢献をしたものと認め調査の結果右決議第 3 項に基き本委員会の決議として同君の表彰につき、可及的速かに適当なる処置を求めることを決定した[56]。

しかし、1950 年 1 月 10 日付、文部事務次官よる内閣官房長官あての回答によれば

> 一、国家的に表彰するが如き場合においては確固たる法律に基いた規程が必要であると考えられるが現在は憲法に基く栄典に関する法規が未決定であるため現行規程では両氏を表象するような該当法規は見当たらない。[57]

ということであった。法的根拠を求めることができないまま、最終的には、時

55）同上。
56）国立公文書館、昭和 25 年叙勲褒章巻 8。「考委彰第 2 号医学博士永井隆君表彰の件」
57）同「閣 3 号、昭和 25 年 1 月 10 日」

の内閣総理大臣吉田茂のもとで、1950 年 4 月 18 日の閣議にて湯川秀樹及び永井隆への銀杯下賜の件として裁可がくだり、最終的に永井隆の表彰は承認された[58)]。

おわりに

こうして永井隆は、生存者叙勲が停止されていた連合国軍占領下の日本において、湯川秀樹と並んで国会によって表彰された。ただし表彰実現までの道のりは平坦なものではなく、彼を表彰の候補者とすること自体に反対する意見も国会内には根強く存在していた。そして、審査が開始されたのちも、その是非をめぐる議論が続いたのであった。衆議院考査特別委員会での議論において、特に日本共産党の議員を中心とした反対者に対抗した代議士岡延右衛門の発言は、自らのカトリック平信徒としての背景に裏打ちされた信念からなされ、永井の表彰プロセスを進展させるひとつの契機となった。と同時に、この考査特別委員会での活動が、岡の代議士生活のなかでも大変貴重な意味を持つ出来事のひとつとなったと思われる。

永井の国家表彰を積極的に支持した岡の代議士としての生活は、１期のみで終わった。永井の表彰を、身を挺して先に進めた岡であった。衆議院選挙での落選後も、岡の政治への情熱はやむことなく、彼を自民党院外団での活動へと導くこととなるのである[59)]。

本研究は JSPS 科研費 JP25K00514 の助成を受けたものです。

58）同「内閣人閣勲 34 号、昭和 25 年 6 月 1 日」

59）吉岡秀太郎『自由党院外団・最後の生き残り』自民党同交会、1991 年、頁数の表記なし。岡は、岸内閣、池田内閣、佐藤内閣などで閣僚を歴任し衆議院議長も務めた石井光次郎を囲む写真に姿を見せる。(doi:10.11501/13210895)

Resumen

Las intervenciones parlamentarias del diputado católico Nobuemon Oka en torno al reconocimiento honorífico del Dr. Takashi Nagai

Chiaki WATANABE

El médico Takashi Nagai, que ejercía en el Departamento de Radiología de la Universidad de Nagasaki y que sobrevivió al bombardeo atómico, recibió en 1950, junto con el físico Hideki Yukawa, galardonado con el Premio Nobel de Física, un reconocimiento honorífico por parte de la Dieta de Japón. Sin embargo, tras la presentación de la propuesta ante la Dieta, surgieron sectores políticos que se opusieron al reconocimiento, argumentando que los méritos de Nagai no justificaban tal distinción.

Un discurso pronunciado por Nobuemon Oka, diputado también originario de Nagasaki, contribuyó decisivamente a orientar el proceso para la concesión del reconocimiento. El presente estudio analiza el proceso de reconocimiento a Takashi Nagai, prestando especial atención a las intervenciones de Oka en la Dieta, siguiendo la trayectoria de la propuesta hasta su aprobación.